

閉会挨拶

山口 第3部でご登壇いただきました近藤さま、塚越さま、南さま、堀江さま、そして司会を務めていただいた大橋理事長、どうもありがとうございました。それでは最後になりますが、Beyond MDGs JAPAN を代表しまして、この構成団体の一つである日本国際保健医療学会の中村理事長よりご挨拶をお願い致します。

中村 九つある構成団体のうちの一つである日本国際保健医療学会の理事長をしている中村安秀と申します。大橋さんが司会するこの第3部で、どんどん面白くなって、今から佳境に入るところで、閉会のあいさつとって、水を差すみたいで申し訳ありません。きょうの議論を聞きながら、実は、日本国際保健医療学会で、昨日行われた東日本地方会での議論を思い出していました。そこでは、丸1日かけて、日本の保健医療、先ほどから言っているユニバーサル・ヘルス・カバレッジで、いろいろ活動していた日本国内の中のマイノリティーと言われる人々の健康問題について議論をしました。外国人の方、難民の方、HIV セクシャリティーの方、発達障害の方、そしてホームレスの方、本当に私たちのユニバーサル・ヘルス・カバレッジは、この人たちに届いていたのだろうかというところから、もう一度、議論をしました。そして、国際保健医療学会ですから、国際的な経験を持ったものが、日本の中で議論して、それをまた国際的な視野で考えるということをしました。

まさに、今、日本の問題は世界の問題であるし、世界の問題は日本の問題です。この辺を謙虚に考えながら、そしてこのポスト MDGs を考えていけたら、日本がいま、世界と共有しなければいけない課題というのは、たくさんあるんだろうなという気がしました。

そういう中で、ちょうど先週、私の大学の学生たち、人間科学研究科というところで、グローバル人間学に関心がある学生たちに、ポスト MDGs のことを聞くと、どんな議論がどうなされているか、もう全く知らないです。「君たちは、新聞を読んでいるのか」って聞いたら、「読んでません」って言っていました。今、彼らはほとんどの情報はネットで見ます。ネットで見ると、自分の好きな情報は見るけれども、好きじゃない情報にはアクセスしない。ポスト MDGs の議論も、そういう遠い世界の出来事なわけです。どうしたらこのポスト MDGs が、君たちの心に響くのか考えてもらう宿題を出しました。メディアとか政治の方々に働きかけて、もっとこのことを知ってもらう必要があるんじゃないかと、学生たちは言っていました。

もう一つの意見は、これは面白かったんですが、もっと小学校や中学校のときに、こういう話を本当は学びたかったけど、実はほとんど学ぶ機会がなかったとも言っていました。そういう意味で大事なことは、今の人々にも、ちゃんと伝える必要があるけど、10年後、20年後に、ポスト・ポスト MDGs を考えてくれる子どもたちにも、いま伝えていく必要がある。そういう長いタイムスパンを持って、日本の中で教育を考え、私たちの議論を伝えていく努力が必要じゃないかなという気がしました。

きょうは、本当に、熱い議論でした。これがまた、何かの発火点になって、きょうで終わりじゃなくて、ここの議論がいろんなところで連続的に続いていくことを期待して、閉会のあいさつにしたいと思います。きょうは、どうもありがとうございました。

山口 中村先生、どうもありがとうございました。第 3 部で、ご登壇いただいた、前にいらした皆さま、そして第 1 部、第 2 部でご登壇いただいた皆さまにぜひ、拍手で感謝したいと思います。ありがとうございます。それでは以上で終わりにします。では、どうもありがとうございました。お気を付けてお帰り下さい。

―― どうもありがとうございました。

(了)